

16～17世紀のスペインの色彩語 *bermejo*, *colorado* 及び *rojo* の語義について

Estudio semántico sobre los tres adjetivos españoles *bermejo*,
colorado y *rojo* en los siglos XVI-XVII

秦 隆昌

1. はじめに

現在のスペイン語では「赤い」を意味する形容詞として *rojo* が最も普通に使用され、初級の語学教材では *blanco* 「白い」、*negro* 「黒い」、*azul* 「青い」、*verde* 「緑の」、*amarillo* 「黄色の」などと共に基本的な色彩語の位置を占めている。また「赤信号」*semaforo rojo*、「赤十字」*Cruz Roja* といった熟語の一部としてもよく登場する。*colorado* は主として人の顔や肌の色を形容し *ponerse colorado* 「赤面する」などのように使う。もちろん *flores coloradas* 「赤い花」のように普通の「赤」の意味でも使われるが、*rojo* ほど使用頻度が高くない。*bermejo* は現在では「黄色味を帯びた赤、朱色」を意味し、普通の「赤」とは区別されることが多く、使用頻度は極めて低い。

古期スペイン語の時代には、この「赤」を代表する *rojo* の役割を *bermejo* が担っていた。過去400年の間に語義の微妙な変化があり、それに伴って「赤」の代表権が *bermejo* から *rojo* に移ったことになる。

2. 先行研究等の記述

色彩語「赤」の通時的変化に詳しい Corominas & Pascual (1980-91) の"rojo"についての記述の中で、本論に関係する部分を要約してみよう。

- ① *rojo* はラテン語 *RUSSEUS* 「鮮やかに赤い」を語源とする。
- ② *rox* の形でロマンス語訳の聖書 *Biblia medieval romanceada* (1475) に現れたのが文献初出例である。
- ③ この語は一般に中世の文献 (*el Cid*, *Berceo*, *Libro de Apolonio*, *Libro de Alexandre*, *J. Ruiz*, *el Conde de Lucanor* など) には現れない。
- ④ 当時「赤」の意味で使われていたのは *bermejo* であり、その後 *colorado* や *encarnado* が出現するが *rojo* より恐らく早くはない。

⑤ rojo が現在と同様にいつの時代においても血の色の「赤」を意味し、rubio「黄金色の、金髪の」とは区別されていたという A. Castro の意見は基本的には受け入れられるが、古典期の人々にとっての roxo は主として今日の我々が "rojizo"「赤みがかった」という語で理解している意味を持っていた。

Covarrubias (1611)の次の記述はこの⑤の内容と一致するものである。

「我々は roxo (現 rojo) と bermejo を次の理由で区別している。即ち、roxo は黄金色を帯びているが、bermejo はもっと燃えるような、もっと熱気を感じさせるような色である。」(見出し語 "bermejo" の語義説明)

ここでは17世紀当時 bermejo が「鮮やかな赤」、roxo が「黄金色を帯びた赤」を意味したと説明している。従って、普通の「赤」は bermejo であったことになる。しかし、同じ辞書の "rosa"「バラ」の項には y queriendo Venus coger una de la carca, se espino la mano, y de la sangre que salio della tomo color rojo la rosa.¹⁾「そしてヴィーナスが木からバラの花の一つを取ろうとした時、手にとげがささり、手から出た血でそのバラ(白バラ)が赤く染まった」という記述があり、ここでは「血」の色の形容語として rojo が使われている。それ以前の *Cantar de mio Cid* を初めとする古期スペイン語の作品では「血」の赤には普通 bermejo が使われていたので、この文献における「血」と rojo の結びつきは一つの新しい傾向であり、17世紀初期に rojo が普通の「赤」の意味でもようやく使われ始めたことを示している。

この傾向はその後現在まで続いている。18世紀の初めに作られた *Diccionario de autoridades* でも、最新の Real Academia の辞書(1992年, 21版)でも「血」の色は rojo で表現されている。

3. Cervantes の作品における「赤」

Cervantes の作品(16~17世紀)のうち『模範小説集』の中に含まれる短編と『ドン・キホーテ』(I & II)の中から「赤」を意味する3語の使用例を見る。²⁾

< bermejo >

Cervantes では bermejo の使用例が非常に少ない。しかも次例のように普通の「赤」ではなく「赤みを帯びた」の意味で用いられている。

(1)(*Quijote*, II, 1章)— De Reinaldos — repondió don Quijote — me atrevo a decir que era ancho de rostro, de color bermejo,...

「(フランスの12貴族の1人)レイナルドスについては」と、ドン・キホーテが答えた。

「顔幅が広く、赤ら顔で、…」

(2)(*Quijote*, II, 10章) Bastaros debiera, bellacos, haber mudado las perlas de los ojos de mi senora en agallas alcornoqueñas, y sus cabellos de oro purísimo en cerdas de cola de buey bermejo, …

(サンチョはキホーテのあこがれの女性ドウルシネアだと思っている田舎娘が侮辱されたと考えて、怒り出し)「悪党どもめ！お前らはわしのお姫様の眼の真珠をコルクガシの虫こぶに変え、純金の髪を赤毛の牛の尻尾の剛毛に変え、… することで満足すればよかったのだ。」

< colorado >

この語は普通の「赤」の意味で使われている。

(3)(*La gitanilla — Novelas ejemplares*) y vio en ellos a un caballero de hasta edad de cincuenta años, con un hábito de cruz colorada en los pechos, de venerable gravedad y presencia;

(ヒロインのジプシー娘ヒタニーリヤが、彼女に恋する男アンドレスの父親の家を探し当てたところ)そしてそこ(バルコニー)に彼女(ヒタニーリヤ)は胸に赤い十字の入った服を着た、50歳ほどの1人の紳士が威厳と品位ある風貌をそなえた姿で立っているのを見た。

(4)(*Quijote*, II, 1章) Visitáronle, en fin, y halláronle sentado en la cama, vestida una almilla de bayeta verde, con un bonete colorado toledano;

遂に二人(司祭と床屋)はドン・キホーテを見舞いに行った。そして彼が緑の粗織りラシャのチョッキを着て、赤いトレード帽をかぶって、寝台の上に上半身を起こしているところを見た。

(5)(*Quijote*, II, 23章) era cejiunta, y la nariz algo chata; la boca grande, pero colorados los labios;

(ラ・マンチャ地方の中心部にあるモンテシーノスの洞穴の中で魔法にかけられた人達をキホーテが見てきたと言って、その様子を語る場面)

彼女(魔法にかけられた貴婦人)は両眉の間が狭く、鼻が幾分低く、口は大きい、唇は赤かった。

< rojo >

(普通の「赤」の意味での使用例)

(6)(*La Galatea*) por ésta se ven los sanctos y conyugales lechos de roja sangre bañados, ora de la triste mal advertida esposa, ora del incauto y descuidado marido.

このため悲しみにくれた愚かな妻やぼんやりで不注意な夫のせいで神聖な夫婦のベッドが赤い血で染まることになる。

(7)(*Coloquio de Cipión y Berganza — Novelas ejemplares*) sale Su Santidad el Papa vestido de pontifical, con doce cardenales, todos vestidos de morado, porque cuando sucedió el caso que cuenta

la historia de mi comedia era tiempo de *mutatio caparum*, en el cual los cardenales no se visten de rojo, sino de morado;

(貧乏な詩劇作家が自分の作品の筋書きについて仲間の俳優に語る部分)

祭服を着けた教皇聖下が、全員紫の装束を着けた12人の枢機卿を伴って登場する。というのは私が芝居に書いた出来事が起こったのは「衣替え」の季節であり、その時季枢機卿達は赤ではなく紫の装束を着けることになっているからだ。

(8) (*Quijote*, II, 58章) los cuales se coronaban con dos guirnaldas, de verde laurel y de rojo amaranto tejidas.

(キホーテとサンチョの方にやって来る2人の美しい牧女についての描写) それら(牧女達の頭髮)は緑の月桂樹の葉と赤い葉鶏頭で編み合わせた2つの花飾りが上にかぶせられていた。

(本来の「赤」とは違う意味での使用例)

(9) (*Quijote*, I, 27章) El Barbero hizo una gran barba de una cola rucia o roja de buey, donde el ventero tenia colgado el peine.

床屋は宿の主人がくしをひっかけていた薄茶色というか赤毛の牛のしっぽで大きなひげをこしらえた。

(筆者注：これは Corominas & Pascual が言う古典期の「赤みがかった」の意味の *rojo* の使用例の1つに加えられるべきものであろう。)

以上の Cervantes における3語の用例を整理すると次のようになる。

- ① *bermejo* は使用頻度そのものが極めて少ないが、その少ない語例について見る限り本来の「赤」ではなく「赤みを帯びた」の意味で使われている。
- ② *colorado* は普通の「赤」の意味で使われている。
- ③ *rojo* は多くの場合普通の「赤」を意味し、時に「赤みを帯びた」の意味でも使われている。また、調べた作品の範囲内で見ると *bermejo* よりも使用頻度が高い。

Corominas & Pascual (1980-91) は古典期における *rojo* が普通の「赤」の意味でも使われていたが、その中心的意味は「赤みがかった」であり、普通の「赤」より薄い色であったとしている。しかし Cervantes の作品では、やや現代寄りの傾向があり、むしろ普通の「赤」の使用例の方が多く見受けられる。ただ、この両種の用例とも作品には登場し、Corominas & Pascual の記述と大きく食い違うものではない。

4. キリシタン関係文献における「赤」

ここでは17世紀初めに出版された『羅西日辞書』（1632）及び『日西辞書』（1630），また同時期にスペイン人宣教師 Collado が残したメモ書きをもとに出版された『西日辞書』について見る。また、これらの辞書に関連して『羅葡日対訳辞書』（1595），『日葡辞書』（1603-04），及び Leon Pages が『日葡辞書』をフランス語に訳した『日仏辞書』（1868）を比較参照する。

< bermejo >

○『羅西日辞書』及び『西日辞書』

全部を点検したわけではないが、一応関係する見出し語について調べた限りでは両辞書には日本語の「赤」に対応する bermejo の用例が見当たらない。

○『日西辞書』

秦（1990）では「赤い、赤色（アカイ）、赤む、赤むる、赤目ダイ」「朱（アケ）、朱印（シユイ）」「紅（ケナイ）」の見出し語をあげたが、今回次の例を追加したい。

（普通の「赤」の意味での使用例）³⁾

(10) Goxiqi 五色 Itçutçuno iro. 五つの色 Cinco colores; s. xõ, uõ, xacu, biacu, cocu. Azul, amarillo, bermejo, blanco, negro. 「5つの色、即ち青、黄、赤、白、黒」

（筆者注：この例を最初に出したのは、日本語の基本的な色彩語が含まれているからで、これによって「赤」を代表する語がこの辞書では bermejo であることが分かる。）

(11) Acafata. 赤旗 Bandera vermeja.⁴⁾ 「赤い旗」

(12) Aqeni somu. 朱に染む Estar teñido en sangre, o de vermejo. 「血に染まる、あるいは朱色に染まる」

(13) Xusuri. 朱磨り（シユスリ）Porcelana, o otra cosa para moler tinta bermeja. 「朱墨を磨る陶磁製のうつわ、その他の物」

(14) Xuuan. 朱椀（シユワン）Acai van. 朱い椀 Escudilla de palo embarnizada de bermejo. 「朱色の漆を塗った木製の椀」

(15) Xuvruxi. 朱漆（シユルシ）Color bermejo de barniz. 「漆の朱色」

(16) Xuye. 朱衣（シユイ）Acai coromo. 朱い衣 Vestido vermejo. S. 「朱色の衣服。文書語」

(17) Cõfacu 紅白 Curenai, xiroi. くれない、白い Bermejo, y blanco. 「赤と白」

(18) Vsugurenai. 薄紅（ウスケナイ）Color bermeja sobre claro. 「非常に薄い赤色」

(19) Benitaqe. 紅茸 Cierta genero de hongos bermejos. 「ある種の赤いきのこ」

(20) Cõbai 紅梅 Acai vme. 紅い梅 Flor bermeja, ¶ Item, Qualquier color bermeja. 「赤い花」

また、あらゆる赤い色」⁵⁾

- (21) Còqin 紅錦 Curenai nixiqi. くないにしき Cierta peça lustrosa como brocadillo, de seda vermeja. 「ブロードのような赤い絹でできたある種の光沢のある布地」
- (22) Còqua 紅花(コウカ) Curenaino fana. 紅の花 Rosa bermeja. 「赤い花」⁶⁾
- (23) Còyô. 紅葉(コウヨ) Momigi. もみぢ Hojas bermejas de los arboles del otoño 「赤くなった秋の木の葉」
- (24) Momigi. 紅葉(モミヂ) Hojas viejas que en el arbol se hazen bermejas en el Otoño. 「秋に木の上で(木についたまま)赤くなる老いた葉」『Per met. Cauoni momigiuo chirasu. 顔に紅葉を散らす Hazerse el rostro bermejo de ira, y verguença. 「比喩的に、怒りや恥ずかしさで顔が赤くなる」(筆者注：後者は普通の「赤」の意味ではない)
- (25) Vsumomigi. 薄紅葉(ウスモミヂ) Hojas viejas del arbol en el Otono antes de hazerse del todo bermejas. 「すっかり赤くなる前の秋の木の老いた葉」
- (26) Acane. 茜(アネ) Vnas Rayzes de yeruas con que se tñe de color vermejo. 「赤色に染めるのに使われる草の根」
- (27) Acane sasu fi. 茜さす日 sol que en las nuues, o otro lugar imprime una reuerberacion vermeja. P. 「雲あるいは他の場所に赤く照り映える太陽。詩歌語」
- (28) Xujenji. 修善寺 Cierta genero de papel vermejo. 「ある種の赤い紙」
- (29) Vsuiro 薄色(ウスイロ) Color que no es muy intensa, o basta. 『Item, Color de Vna flor que llaman, Tçubaqino fana, que no es totalmente bermeja. 「余り強烈でない、あるいは濃くない色。また、完全には赤くなっていない椿と呼ばれる花の色」
- (30) Carasuvri. 烏瓜(カラスリ) Cierta genero de pepinos pequeños bermejos, y syluestres. 「ある種の赤くて小さい野生のキュウリ」
- (31) Fanaxôbi 花しょうび Cierta rosa bermeja. 「ある種の赤い花」
- (32) Manjuxaqe. まんじゅしゃけ Vna cierta rosa bermeja que florece en el otoño. 「秋に咲くある種の赤い花」⁷⁾
- (本来の「赤」とは違う意味での使用例)
- (33) Acadaicon. 赤大根(アカダイコン) Rabano vermejo. melius Murasaqui daicon. 「赤い大根。『紫大根』と言う方がよい」⁸⁾
- (34) Benidaicon. 紅大根 Rabano vermejo. Palabra de mugeres. 「赤い大根。女性語」
- (35) Murasaqidaicon. 紫大根(ムサキダイコン) Rabano bermejo. 「赤い大根」
- (36) Xiso 紫蘇(シソ) Cierta yerua bermeja. 「ある種の赤い草」⁹⁾

- (37) Acagauo. 赤顔(アカガ'ヲ) Rostro vermejo. 「赤い顔, 赤ら顔」
- (38) Acazzura. 赤面(アカツ'ヲ) Rostro vermejo. 「赤い顔, 赤ら顔」
- (39) Acagaxira 赤頭(アカガ'シヲ) Cabellos vermejos, l, ruuios de la cabeça. 「赤毛の, あるいは金色の髪」
- (40) Acagome. 赤米 Arroz ve(r)mejo. 「赤みを帯びた米」
- (41) Acatçuchi. 赤土 Tierra vermeja. 「赤みを帯びた土」
- (42) Cõbai tçuqigue 紅梅月毛(コウバ'イツキガ') Cauallo de color blanca con mezcla de bermejo. 「赤毛のまじった白馬」

< colorado >

○『羅西日辞書』

秦(1990) で見たように日本語の「赤い, 赤む, 赤土(アカツ)」に対応するスペイン語として colorado が使用されている。

○Collado の『西日辞書』

3語の中では bermejo, rojo の例が見当たらず colorado だけが使われている。

- (43) (西) colorada cosa. (日) ACAI. 赤い¹⁰⁾
- (44) (西) colorado, encarnado, encendido ser. (日) MOYETATÇU CURENAI NO IRO GIA.
燃え立つ紅(カナイ)の色じゃ。

○『日西辞書』

bermejo に比べると極端に使用頻度が低くなるが、用例が全くないわけではない。

(普通の「赤」の意味での使用例)

- (45) Xuden. ,l, xubiqi. 朱点(シュデン)または朱引(シュビキ) Raya hecha con tinta colorada, segun el modo de la qual se entiende si la letra es de lugar, o dignidad, persona, &c. 「朱墨で引いた線で, その引き方によってその文字が場所, 職階, 人などのうちのどれを表すかが分かるもの」
- (46) Cõqet 紅血(コウク) Curenaino chi. くれないの血 Sangre muy colorada. 「真っ赤な色の血」

(本来の「赤」とは違う意味での使用例)

- (47) Xeqimen. 赤面 Acai vomote. 赤い面 Ponerse colorado de verguença, o aprieto, y trabajo.

「恥ずかしく思ったり、せいていたり、力を入れたりして赤くなること」

< rojo >

○『羅西日辞書』

秦 (1990) で見たようにこの辞書では colorado が圧倒的に多いが roxo の例もわずかながらある。

(48) (羅) RUBEFACIO, IS; (西) hazer roxo colorado, (日) ACAME, URU. 赤むる。¹¹⁾

○ Collado の『西日辞書』

rojo の例は見当たらない。

○『日西辞書』の例

この辞書では意外にも roxo の大部分が「紫」に対応し、少数の例が「黄褐色」とでも言うべき色に対応している。ポルトガル語はともかく、スペイン語については「紫」の意味で roxo (現 rojo) が使用されたという研究者の指摘は今までなされていないと思う。

(「紫」の意味の使用例)

(49) Murasaqi. 紫(ムラサキ) Color roxa. 「紫の色」

(50) Vsumurasaqi. 薄紫(ウスムラサキ) Roxo claro. 「薄い紫」

(51) Comurasaqi 濃紫(コムラサキ) Color roxa. 「紫の色」

(52) Cõxi 紅紫(コウシ) Curenai murasaqi. ぐれないむらさき Bermejo, y roxo. 「赤と紫」

(筆者注：この例で分かるように『日西辞書』では bermejo と roxo を同義と解釈していない)

(53) Murasaqi susogo. 紫裾濃(ムラサキスゴ) Color roxa que dan a el hilo con que texen las armas.

「鎧を編む糸を染める紫の色」

(54) Xiun 紫雲(シウン) Murasaqi cumo むらさきくも Nuue de color roxa. 「紫色の雲」

(55) Xiye 紫衣(シイ) Murasaqino coromo. むらさきのころも Abito, o vestido roxo de dignidad.

「高い地位を示す紫色の法衣または衣服」

(56) Qiqiò iro. 桔梗色(キョウワカ) Color desta flor que es entre azul, y roxo. 「青と紫の中間のこの花(桔梗)の色」

(「黄褐色」のような色の意味での使用例)

これは Corominas & Pascual (1980-91) の言う "rojizo" 「赤みがかった色」に相当するもので、

彼らの解釈によれば古典期の人々にとってはこちらの方が rojo の第一義ということになる。

(57) Ameiro. 鉛色(アメイ) Color como roxo de aquella aguamiel de japon. 「あの(前出の見出し語にある)日本の水あめの黄褐色のような色」

(58) Ameuji. 1, Acauji 黄牛(アカウジ)または赤牛(アカウシ) Buey, o vaca, Roxa, o ruuia. 「赤みがかった,あるいは黄金色の牛」¹²⁾

(59) Cuchiba. 1, Cuchiba iro. 朽ち葉,あるいは朽ち葉色 Color encarnada que tira mas para roxa, o amarilla. 「黄褐色または黄色に近い赤みがかった色」

5. 「紫」を意味する色彩語

前節で「赤」に相当するスペイン語形を見ていく過程で『日西辞書』では日本語の「紫」にスペイン語の roxo が対応していることが明らかになった。これは恐らく本稿が初めて指摘する事項であると思われる。しかし、これによって当時のスペイン語の roxo が「紫」を意味することもあったと即断することはできない。むしろ私はこれが『日西』の編者の誤訳の結果ではないかと推測している。本節では焦点を「赤」から「紫」に移してこの問題を更に考察する。

現在のスペイン語では「紫」を表す色彩語として violeta, morado, purpúreo などが使用されているが、16~17世紀はどうであったか。「赤」について見た同じ資料に当たってみよう。

先ず Cervantes の作品では上掲の(7)の例文に morado の例が出ている。それをもう一度引用して見る。

(7)(*Coloquio de Cipión y Berganza—Novelas ejemplares*) sale Su Santidad el Papa vestido de pontifical, con doce cardenales, todos vestidos de morado, porque cuando sucedio el caso que cuenta la historia de mi comedia era tiempo de *mutatio caparum*, en el cual los cardenales no se visten de rojo, sino de morado;

祭服を着けた教皇聖下が、全員紫の装束を着けた12人の枢機卿を伴って登場する。というのは私が芝居に書いた出来事が起こったのは「衣替え」の季節であり、その時季枢機卿達は赤ではなく紫の装束を着けることになっているからだ。

面白いことに、ここでは「赤」rojo と「紫」morado がはっきり対比されている。仮に rojo = 「紫」とすると、作品中の rojo と morado は同じ色を表していることになり「衣替え」の意味がなくなってしまう。上掲文が意味を持つためには rojo は紫とは違った色と解釈しなければならない。

次にキリシタン文献を見ると、次のような用例がある。

- (59) (羅) VIOLACEUS COLOR. (西) morado color. 「紫色」 (日) MURASAQI
(『羅西日辞書』)
- (60) (西) cardeno. 「紫の」 (日) MURASAQI. (Collado の『西日辞書』)
- (61) (西) color morado. 「紫色」 (日) MURASAQI. (Collado の『西日辞書』)

以上の例を見ると「紫」に関して Cervantes の作品と Collado が編集した『羅西日』及び『西日』の両辞書の間には共通点があるが、『日西辞書』との間には極端な違いがあり、『日西辞書』が非常に特異な用例を持つ文献であることが分かる。

ポルトガル語について見ると『羅葡日対訳辞書』の「紫」の項は次のようになっている。

- (62) (羅) Violaceus, a, um. (葡) Lus. Cousa roxa, ou de côr de violeta.

「紫色のもの、即ちスマレの色をしたもの」 (日) Iap. Murasaqi ironaru mono.¹³⁾

ここでは具体的に植物の「スマレ」を例示しながら形容詞 roxo の内容を説明しているの、ポルトガル語の roxo が当時も「紫」を意味したことは疑う余地がない。次に前節で見た『日西辞書』の「紫」に関係する8つの見出し語((49)~(56))を『日葡辞書』と対照してみると、『日葡』では8例すべてに同形のポルトガル語 roxo が対応している。また同じ箇所を『日仏辞書』に当たってみると、8例のうち7例がフランス語の violet に対応している。対応しない1例は「紅紫(コウジ)」の場合で、rouge「赤」が対応し、Vermeil (rose) et rouge と訳されている。

「紅紫」は「赤と紫」という原義の他に「様々な美しい色」の意味があり、『日仏』ではこの全体の意味を考えて意識し、『日葡』の Vermelho, & roxo. の逐語訳はしなかったのではないかとと思われる。全体的に見て「紫」に関する『日葡』『日仏』の記述の間に特に矛盾はない。問題は『日西』の roxo で、これを「紫」の対応語とすると同時代の他の文献とは大きく食い違う。この問題については今のところ私は『日西辞書』の編者が日本語の「紫」の意味を十分に理解しないまま、ポルトガル語形をそのまま機械的に同形のスペイン語に直訳したのではないかと考えている。「黄褐色」の意味で使われた『日西』の roxo (上掲(57)~(59)の例)は『日葡』では3例ともポルトガル語の louro「黄金色の」が対応している。こちらの方は当時の他のスペイン語文献にも見られる語義の範囲内にあり、問題はないと考えられる。

6. むすび

本稿で得られた結論を整理すると次のようになる。

- ①16~17世紀においては bermejo, colorado, rojo のうち「赤」を一般的に代表する語は文献によって異なり、Cervantes の作品では rojo, 『日西辞書』では bermejo, その他のキリシタン関係の対訳辞書では colorado であり、1つの語に限定できない。これは当時これらの語の

意味が微妙に変化する過渡の時期に当たっていた事情を反映していると考えられる。

- ②『日西辞書』は当時の日本語とスペイン語の語彙の対応関係を詳細に示してくれる貴重な資料ではあるが、既にできあがっていた『日葡辞書』を翻訳する形で編纂されたため、時には原本のポルトガル語形に引きずられ、機械的な直訳ですまされた部分があるのではないかと考えられる。今回注目することになった「紫」の訳語 roxo はその1例ではないだろうか。これが『日西辞書』の誤訳と断定するにはまだ根拠が不十分であるが、その蓋然性はあると考えられる。

【注】

- 1) 色彩語の下線は筆者（以下同じ）
- 2) 綴り字は引用文献のものをそのまま使用した。従って、初版本で Quixote, dezir, quando などとなっている当時の綴り字は Quijote, decir, cuando などに書き換えられている。
- 3) キリシタン関係文献の引用での日本字表記はすべて筆者が付したもの。また「 」内は欧文の筆者による和訳を示す。
- 4) 『日西辞書』では bermejo(ja) は vermejo(ja) の形でも表記され、綴り字が一定していない。
- 5) 見出し語「赤い梅」に対してスペイン語 flor bermeja 「赤い花」を当てている。『日葡辞書』もこの部分は flor vermelha 「赤い花」になっている。
- 6) この辞書中で rosa は時に「花」一般をさすことがある。その場合『日葡辞書』も同じ語を使っている。
- 7) 最近では黄色のマンジュシャゲも見かけるが、以前から日本にあったものは、あの独特の「朱色」の花をつける種類のものである。
- 8) この大根は赤紫色をしていて、普通の「赤」とは異なる。(33)–(35)の3例は同じ種類の大根をさしていると考えられる。
- 9) シソの葉の色は「赤紫」あるいは「紫」と言ってもいいものであるが、ここでは bermejo が使われている。
- 10) Collado の『西日辞書』の引用で (西) (日) の標示をつけ、日本語ローマ字表記の部分は大文字に変えたのは筆者。
- 11) 『羅西日辞書』の引用で (羅) (西) (日) の標示をつけ、ラテン語と日本語のローマ字表記の部分は大文字に変えたのは筆者。
- 12) 「あめ色」には「黄」の字が当てられるが、実際の色は薄い黄褐色。
- 13) (羅) (葡) (日) の標示は筆者。

【参 考 図 書】

- Alonso, Martín (1986) : *Diccionario medieval español desde las Glosas Emilianenses y Silenses (s. X) hasta el siglo XV*, Univ. Pontificia de Salamanca)
- (1982) : *Enciclopedia del idioma*, Aguilar, Madrid.
- Corominas, Joan (1961) : *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, Gredos, Madrid.
- Corominas, J. & Pascual, J.A. (1980-1991) : *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, Gredos, Madrid.
- Covarrubias Orozco, Sebastián de (1611) : *Tesoro de la lengua castellana o española* (Ed. de Ediciones Turner, S.A., Madrid, 1977)
- Fernández Gómez, Carlos (1962) : *Vocabulario de Cervantes*, Real Academia Española, Madrid.
- García de Diego, Vicente (1954) : *Diccionario etimológico español e hispánico*, Madrid.
- Gómez de Silva, G. (1985) : *Elsevier's Concise Spanish Etymological Dictionary*, Amsterdam, London, New York, Tokyo.
- Real Academia Española (1726-37) : *Diccionario de la lengua castellana*, Madrid (Edición facsímil de Editorial Gredos, Madrid, 1976 ; 通称 *Diccionario de autoridades*)
- 大塚光信 (解題) (1979) 『羅西日辞書』, 勉誠社 (Diego Collado 編, 原書名 : *Dictionarium sive thesauri linguae iaponicae compendium*, Romae, 1632 (亀井孝氏蔵書) の複製版)
- 大塚光信・小島幸枝 (編) (1985) 『コリヤード自筆 西日辞書』, 臨川書店。
(底本はバチカン図書館 Biblioteca Apostolica Vaticana 所蔵 *Vocabulario de la Lengua Japona*; 筆者 Diego Collado は1619年来日したスペインのドミニコ会宣教師。生年不詳, 没年は1638年)
- 亀井孝 (解題) (1975) 『日葡辞書』, 勉誠社 (Oxford 大学 Bodleian Library 所蔵本 *VOCABULARIO DA LINGOA DE IAPAM com a declaração em Portugues, feito por ALGVNS PADRES, E IRMAÕS DA COMPANHIA DE IESV*, Nangasaqui, 1603 & 1604 の複製版)
- 天理大学出版部 (1972) 『日西辞書』, 雄松堂書店 (原書名 : *Vocabulario de Iapon declarado primero en portugves por los padres de la Compañia de Iesus de aquel reyno, y agora en Castellano en el Colegio de Santo Thomas de Manila*, Manila, 1630 (天理大学図書館蔵書) の複製版)
- 土井忠生 (解題) (1958) 『日仏辞書』, 一誠堂書店 (Léon Pagés: *Dictionnaire japonais-français*, Paris, 1868 の複製本)
- 土井忠生他 (編訳) (1980) 『邦訳日葡辞書』, 岩波書店。
- 秦 隆昌 (1990) 「『日西辞書』におけるスペイン語の語彙についての一考察」 (崎山理・佐藤昭裕他 (編) 『アジアの諸言語と一般言語学』, 三省堂, pp.808-818)

福島邦道・三橋健（解題）（1979）『羅葡日対訳辞書』，勉誠社（Oxford 大学 Bodleian Library 所蔵本 Dictionarivm Latino Lvsitanicvm, ac Iaponicvm, ex Ambrosii Calepini volumine de-promptum, Amacvsa, 1595 の複製版）

【引用作品】

Cervantes (1585) : *La Galatea* (Espasa-Calpe, 1968 ; Clásicos Castellanos 155, *La Galatea II*)

Cervantes (1605) : *Don Quijote de la Mancha I* (Espasa-Calpe, 1967 ; Clásicos Castellanos 4, 6, 8, 10, *Don Quijote de la Mancha I-IV*)

Cervantes (1615) : *Don Quijote de la Mancha II* (Espasa-Calpe, 1969 ; Clásicos Castellanos 13, 16, 19, 22, *Don Quijote de la Mancha V-VIII*)

Cervantes (1613) : *Novelas ejemplares* (Ed. de Sopena Argentina, Tomo 1 y 2, 1955-56) (日本語名『模範小説集』)